

大阪府富田林市在住の女優、新屋英子さん（77）が33年間ライフワークとして続けている一人芝居の公演回数が、6日で3000回を迎える。ハンディや差別を乗り越えて生きる人

たちを演じ、依頼があれば全国どこでも駆けつけてきた。「芝居は観客がいてこそ成り立つ。見たいという人がいる限り、1回でも多く演じたい」と話している。

一人芝居3000回

新屋英子さん 差別、ハンディに挑む姿演じ



「1回でも多く演じたい」と意気込みを語る新屋さん

新屋さんが一人芝居を始めたのは昭和四十八年。四十五歳で、新劇の劇団員として活動していたとき、「これで一人芝居をしてみたら」と知人に手渡されたのが「身世多鈴」という本だった。十二人の在日一世の韓国・朝鮮人女性から聞き取った半生記。貧困や戦争の中を懸命に生きてきた女性たちの姿に「同じ日本にいながら、なぜ今までこの人たちの存在を意識しなかったのか」と涙があふれた。

その「身世多鈴」の初演は、梅田の喫茶店。新屋さんふんする白いチマチゴリ姿の在日一世の老女が、一人語りで人生を振り返る。十五歳で日本に渡り、貧困や戦争の中で生きてきた人生を、ユーモアを交えて演じる。舞台は評判を呼び、全国から公演依頼が殺到するようになる。「一人芝居のいとこはどんな場所でもできる」とバッグ一つで駆けつけた。ビール箱の舞台も、トイレが楽屋のこともあった。

公演は昨春に二千回を数え、新たな一人芝居にも挑戦した。脳性まひの子供を持つ母親を描いた「草ちゃんの青空」、差別部落出身の女性の一生を描いた「ヒミコ伝説」など。困難や差別を正面からとらえている作品が多い。六日の「身世多鈴」の舞台で、全一人芝居の公演回数は計三千回になる。記念公演は運送会社の社長の企画で、大型トラックの荷台が舞台。「私らしい場所かも」と新屋さんは笑う。三千回という数字は、ただ依頼されるまま、心を込めて演じてきた積み重ねだ。「今は芝居をするために、生かされている気がする。体力が続く限り回数を重ねていきたい」と話した。六日の公演は大阪市平野区平野東の「東陽運輸」本社駐車場で、午後四時半開演。入場無料。